
金の鮫

知蔵

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金の鉈

【Nコード】

N5127T

【作者名】

知蔵

【あらすじ】

ある森の泉の前で少年がバットで素振りをしてましたが、そのバットが泉の中に落ちてしまいました。でも、泉の中に現れたのは……イソップ童話の『金の斧』と『ひぐらしのなく頃に』のクロス小説です！あまり面白くないかもしれませんが、暇な時には読んでみて下さい。

昔々、ある森の泉の前で金髪の少年が金属バットを両手で握りながら素振りをしていました。

「ふんっ！ふんっ！！」

少年が額に汗を流しながら力強く素振りを続けていると……………。

ツルッ！！

「あっ！？しまった！！」

次の瞬間、少年の汗ばんだ手からバットが勢い良く滑り落ちてしま……………。

バツシャー……ン！！

そして、バットはそのまま近くの泉の中に落ちてしまいました。

「むう、困ったなあ…………あのバットが無いと試合に出られないよ…………」

…。」

そう呟きながら、少年が腕を組んで困惑な表情を浮かべながら途方に暮れていると……………。

ブクブクブクブク……………。

突然、泉の中からブクブクと小さな音を出しながら泡が出てきました。

「な、何だ？」

少年が不思議に思い泉の中を覗き込もうとした時……………。

ピカアーーーーーッ！！

「うわっ！？」

泉の中から目映い程の強い光が発生して、少年はあまりの眩しさに思わず腕を覆ってしまいます。

「い、一体何がどうなって……………あっ!？」

少年がゆっくりと目を開けてみると、泉の上にオレンジ色のショートヘアの可愛い少女が満面の笑みを浮かべながら佇んでいました。

「あ、貴女は……………?」

「初めまして、レナは……………じゃなくて、私はこの泉に住んでいる女神様だよ、だよ。」

「め、女神様!？」

少年は自らをこの泉の女神様と名乗る少女の言葉を聞いて素直に驚いてしまいます。

「ところで、貴方はさっきこの泉で何か落とさなかったかな?かな?」

「え?……………あ!は、はい!確かに、この泉でバットを落としました!」

「やっぱり……それじゃ、貴方が落としたのはこの金のバットかな？かな？」

そう言うと、女神様は何処からか金ピカに輝く金のバットを取り出して少年に見せます。

「い、いえ！違います！」

「そう……じゃあ、この銀のバットかな？かな？」

すると、次に女神様は銀ピカに輝く銀のバットを取り出して少年に見せます。

「そ、それも違います！僕が落としたのは普通の金属バットです！」

「普通の金属バット……コレの事かな？かな？」

そう言うと、最後に女神様は少し薄汚れているごく普通の金属バットを取り出して少年に見せます。

「は、はい！それです！僕が落としてしまったのはそのバットです！」

少年がそう答えると、女神様は先程よりも満面の笑みを浮かべながら少年に金属バットを差し出す。

「はい、正直に答えたから返すね？」

「あ、ありがとうございます!!」

少年は女神様からバットを返されて深々と頭を下げながらお礼を言います。

「……それと、この二つのバットもあげるよ。」

そう言うと、女神様は先程の金のバットと銀のバットも少年に差し出します。

「そ、そんな!こんな高価そうな物まで受け取れませんよ!」

「いいからいいから、正直に答えた貴方に女神様からのご褒美だよだよ」

「で、でも……………」

「それじゃ、私はこれで……………さようなら」

少年の言い分も虚しく、女神様は笑顔のまま泉の中へと姿を帰ってしまいました。

「行っちゃった……………」

少年はしばらくの間、三つのバットを抱えたまま泉の前で啞然とした表情を浮かべながら佇んでいましたとさ……………。

↓数分後↓

しばらくして、少年は女神様から授かった三つのバットを隠すように持ちながら村へと続く道を歩いていました。

「むう、どうしよう……こんなにバットを賣っちゃって……。」

そう言いながら、少年が困惑した表情を浮かべていると……。

「よお！悟史じゃねえか。」

「ん？」

悟史と呼ばれた少年が声がした方に振り向いてみると、そこには悟史と同じぐらいの年齢の茶髪の少年が立っていました。

「ああ、圭一か……。」

「今日も試合に備えて素振りの練習でもしてたのか？いつもご苦労なこったな。」

「ま、まあね……。」

悟史が圭一という名前の少年と軽く世間話をしていると……。

「ん？ところで悟史、その背中に隠してるのは何だ？」

「え？あゝ、コレね……実はこんな物を貰ったんだけど……。」

そう言うと、悟史は先程女神様から貰った金のバットと銀のバットを圭一に見せました。

「ぬおっ！？そ、それって……本物の金と銀か！？」

「さ、さあ……多分、本物だと思うよ……。」

圭一が金のバットと銀のバットを見て我が目を疑ったので、悟史は更に困惑した表情を浮かべてしまいます。

「……にしても、こんな高価な物どうやって手に入れたんだ？」

「えっと、信じられないかもしれないけど……。」

悟史は圭一に泉に住む女神様から金のバットと銀のバットを授かった事等を全て話しました。

「……つまり、その女神様から金のバットと銀のバットを貰った

って訳か？」

「うん、そういう事。」

「ほお、こりゃ良い事を聞いたな……………サンキュー悟史！早速俺もその泉に行って試してみるぜ！」

「あ！でも、一つだけ注意しなきゃいけない事が……………」

悟史の呼び掛けも虚しく、圭一は泉に向かって全力疾走で駆け出してしまいました。

「……………あゝあ、行っちゃった……………それにしても、この金と銀のバットはどうしよう……………沙都子に見せたら喜ぶかな？」

そう言いながら、悟史はその場から立ち去るように再び歩き始めるのでした……………。

く更に数分後く

しばらくして、圭一は悟史から聞いた森の泉にやって来て佇んでいました。

「へえく、此処だな……悟史が言ってた女神様が現れた泉ってのは………そんじゃ、早速この泉に何かを落としてみるか………。」

そう言つて、圭一はズボンのポケットに手を入れて何かを探ろうとしますが………。

「って、何にも入ってねえな………参ったなあ、この辺りに何か落ちてねえかな………ん？」

圭一が何かめぼしい物が無いか辺りを見回してみると、木の近くに落ちてる大きな鉈なたが目に写りました。

「何でこんな所に鉈が落ちてんだろ………どっかの樵きしうが落つことしたのか？」

そう思いながら、圭一は鉈を拾い上げて不審に思いながら鉈を舐め

回すように見つめます。

「まあ、どうせ落とすぐらいだからそんな大した鉈じゃないだろう……
よし！まずはこの鉈を落としてみるか！」

バツシャーーン！！

圭一は手に持った鉈を泉に向けて放り投げてしまいます。

（さうで、果たして本当に女神様とやらが現れるのかどうか……。
）

そんな事を思いながら、圭一が内心ワクワクしながら女神様が現れるのを待っている……。――

ブクブクブクブク……

突然、泉の中からブクブクと小さな音を出しながら泡が出てきました。

（おっ！？ま、まさか……。）

ピカアーーーーッ!!

「わあっ!?!」

すると、泉の中から目映ゆい程の強い光が発生したので圭一はあまりの眩しさに思わず腕を覆ってしまいます。

「な、何が起こったんだ……って、おわっ!?!」

圭一がゆっくりと目を開けてみると、泉の上には女神様が満面の笑みを浮かべながら佇んでいました。

「初めまして、私はこの泉に住んでいる女神様だよ、だよ。」

(こ、この人が女神様か………何て可愛らしくて笑顔が似合う女神様なんだ……。)

圭一は女神様の美しさに思わず見惚^{みと}れてしまいます。

「ところで、さっき貴方が落としたのはこの金の鉈かな?それとも、この銀の鉈かな?かな?」

そう言うと、女神様は何処からか金ピカに輝く金の鉋と銀ピカに輝く銀の鉋を取り出して圭一に見せます。

（おおー！アレは正しく金の鉋と銀の鉋……よし、後は女神様の質問に答えればあの二つの鉋は俺の物だ！）

そんな事を思いながら、圭一は怪しい笑みを浮かべながら金の鉋と銀の鉋を食い入るように見つめます。

「はい！そうです！俺はその金の鉋と銀の鉋を落としました！」

圭一が女神様の質問に対して嘘を吐いた時……。

「……………本当に？」

「え……………？」

すると、女神様が先程の笑顔とは打って変わって一切の光を宿していない瞳と冷たい表情を浮かべながら圭一を見つめてきます。

「……………もう一度だけ聞くよ？圭一君は本当にこの金の鉋と銀の鉋

を落としたのかな？かな？」

「え、えっと……………その……………っていうか、何で俺の名前を……………」

圭一は女神様の全てを見透かされてるような目を見て背筋が凍るような感覚を覚えてしまいます。

(……………ま、まさか俺の嘘が見抜かれちゃったのか？……………いや、落ち着け！クールになれ！男が一度切り出した事を貫き通さけりや『口先の魔術師』と呼ばれた前原圭一様の名が廃るぜ！！)

そう思っつて、圭一は恐る恐る震えながら口を開いて喉から声を振り絞って女神様にこう答えます。

「ほ、本当です！俺は確かにその金の鉦と銀の鉦を落しました！！」

圭一は声を震わせながらも女神様に力強く答えたのですが……………。

「嘘だッ！！！！」

「っ！？」

女神様の鬼のような恐ろしい形相と辺り一面に響き渡くような鋭い怒声に圭一は度肝を抜かされてしまいます。

「……………圭一君が落としたのはこの普通の鉈だよね？なのに、どうしてそんな嘘を吐くのかな？そんなにこの金の鉈と銀の鉈が欲しかったのかな？かな？かな？かな？」

更に女神様は圭一が本当に落とした普通の鉈を取り出して、早口で質問しながら圭一にどんどん近付いてきます。

「い、いや……………俺はただ……………その……………」

「でも、そんなに欲しかったらあげるよ……………だから、受け取って！！」

ブンッ！！

次の瞬間、女神様が持っていた金の鉋をまるでブーメランのように圭一に向けて投げ付けました。

「おわっ！？」

ザクッ！！

すると、圭一は何か間一髪避けたので女神様が投げ付けた金の鉋は圭一の背後に生えていた木に突き刺さりました。

「あゝあ、どうして避けちゃうのかな…………折角金の鉋を圭一君にプレゼントしようと思ったのに…………。」

「こ、殺される…………逃げろお……………」

恐怖を覚えた圭一は、その場から慌てて逃げ出してしまいます。

（ち、畜生…………このまま殺されて堪るか！！）

そう思いながら、圭一は女神様から逃れようと全力疾走で走っている……。

[illegible]

「つ！？」

圭一が背後から狂気に満ちた笑い声を耳にしたので振り向いてみると、圭一の背後から両手に金の鉈と銀の鉈を持った女神様が物凄いスピードで追い掛けてきました。

（お、追い掛けてきやがった……しかも、何てスピードなんだ！？）

「ねえ？ どうしてそんなに逃げるの？ 欲しかったんでしょ？ この金の鉋と銀の鉋が……。」

「い、知らない！俺はもうそんな鉈なんか欲しくない！」

「嘘だよね？」

「……………フッフ、やっと追い付いた♪」

「なっ!？」

女神様は既に金の鉈と銀の鉈を持って未だに冷たい目と表情を浮かべながら圭一の目の前に佇んでいた。

「ま、待ってくれ……………俺が悪かった!もう二度嘘を吐かないから許してくれ!!」

圭一は女神様に向かって深々と土下座しながら謝罪をします。

「……………じゃあさ、本当にこの金の鉈と銀の鉈はいらないんだね？」

「あ、ああ!本当の本当にいない!!」

「……………。」

圭一が力強く答えて、女神様が深々と土下座をし続ける圭一をただ黙ってジッと見続けていると……………。

「……………分かった」

「え……………？」

圭一が顔を上げると、女神様が満面の笑みを浮かべながら持っていた金の鉈と銀の鉈を辺りに投げ捨ててしまいました。

「圭一君が金の鉈と銀の鉈がいらないっていうのはよく分かったよ……………だから、許してあげる。」

「そ、そっか……………良かったあ……………」

圭一が女神様の言葉を聞いて心の底から安心した時……………。

「……………あ！そうだ！」

「……………え？」

突然、女神様が何かを思い出したかのように声を上げたので圭一の全身に緊張感が伝わってきました。

「圭一君、一番最初に普通の鉈を泉の中に落としたよね？だから、それだけはちゃんと返してあげないとね……………」

（な、何だ……………その事か……………。）

圭一は女神様の言葉を聞いた途端、先程の緊張感も一気に抜けてしまいます。

「そ、そうだな！俺が落とした鉈だから……………な……………」

圭一が下げていた頭を上げてみると、一番最初に圭一が泉の中に落とした大きな鉈を今にも振り翳そうと高々を掲げていた女神様が圭一の目に写りました。

「な、何を……………？」

「だからね、この鉈を返してあげるの……………レナの泉に落つことしたドジな圭一君にね」

「ま、待てよ……………な、何でこんな……………」

「それじゃ、早速返すからね……………そーれっ!!」

その言葉を合図に、女神様が高々と掲げていた鉈が圭一の頭上目掛けて勢い良く振り翳されていきました……………。

「う、うわあああああああああ!!」

それから、この日以来圭一の姿を見た人は居なかったとか……………。

（後書き）

という訳で、『ひぐらしのなく頃に』とイソップ童話のクロス小説でした。

因みに、この作品はただ単に自分が思い付いて書いただけの物です（苦笑）。

もし、またこういう『ひぐらし』と童話&昔話のクロス小説を思い付いたら書くと思います（苦笑）。

それでは、最後まで読んで下さいまして本当にありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5127t/>

金の鉈

2011年10月5日05時53分発行